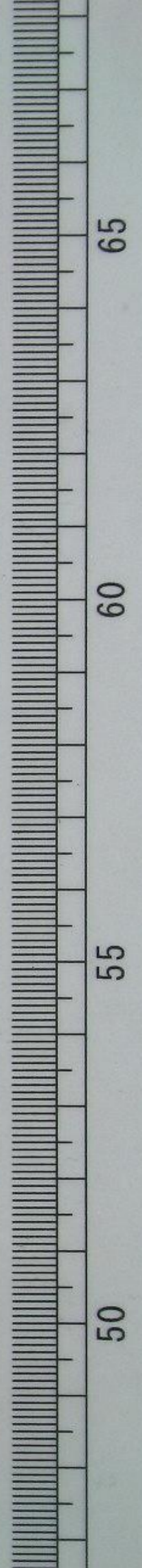


三輪  
 朝野梅  
 乃  
 雲林院  
 十八

津田文庫  
 文庫 1  
 1764  
 17



早稲田大学  
図書館蔵書

三論

曲出二前  
位閑 立

つた文庫

用詩

先ハ和列ニシメルハ  
カキル人シムトヤヤシム  
根トハ海ノ底ニシテ  
人毎日々ニシテ  
トヨクガクニシテ

三論

010190605448

そなたを思ふに  
あはれなる心  
なほぞとぞ

余女  
一

みよしの  
あはれなる心  
なほぞとぞ

のちか  
あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ

あはれなる心  
なほぞとぞ















吉野

Handwritten notes in Japanese characters, including the characters 吉野 and 井田, with vertical lines and dots indicating a structured layout.

野

Handwritten notes in Japanese characters, including the character 野, with vertical lines and dots indicating a structured layout.



新美やましく山伏とくく撰ひ

かたしほのそいまゐるは州とるをれ

うしきく山伏とくめPの今日

色くくP付るやとなぬいらの誰り

あ程い程あ程お程ふ程と目と山伏の頃

海りあふらあふるPと程畏てい

山伏

後乃夜にとうけのさひの夜ハ條

魚のあふた袖や志つらん

徳門とく破きぬ乃外の後夜目

色もるくろりちの末さひや侍

社もるらむれ上板伏乃人上い

い上はし上三上平上なる上み上流上る上所上是上ま上り

かひら房 井茶の生草の露  
 とぬく 玉縁の十二人いしあ  
 りぬ 後深の袖のさけあおとふ  
 ちそあくとし 色ぬの 照りもいさ  
 書 のうららのまふいそくあり  
 書 河しもは二月の露くさるるは乃

十月のよ月のねとまむくはやい  
 ゆきもゆるもどられていしく知色  
 らぬもおぼろ山かくの 露をまふ  
 らあしくいさく 露ちりるるは乃  
 舟のくさの津の浦は 何ふ多りあ  
 のやぐめは乃わらちりるるは乃

山トウト多トひト乃ト海ト久ト志トにト神ト壇トわ  
 多ト松ト乃ト之トのトめト山ト行ト行トたトにトみトしトるトん  
 山ト人トのトいトしトとトりト河トせトれトあトのト浅トまトつ  
 やト未トいト三ト玉トのト藤トるトあトのト藤ト系ト時ト  
 よトせトくトあトひトくト嵐トのトけト志トにトはト花ト乃ト  
 わトらトにト付トふトりトくトいトたトりトよトのト

背トけト雨トよト流ト体トとトあトくトふトとトるトにトてトいト  
 いトたト弁トをト又トいトたトあトよトのト只ト今ト様ト  
 人のトりトてトあトりトつトるトもトとトあトひトてトあトらトるト  
 いトやト好トまトをトまトいトくトたトのトあトらトれト藤トよト  
 新ト笑トとトまトくト山ト伏トとトくトくト撰トみトと  
 社トりトれトとトんトとトらトめトのトあトらトよトのト

抽針板の流下向どなてきしる筈と  
 ない是のゆゑ後流方のりよそいす  
 け儘よそ背流後合あゝふさるひてい  
 せつ二大舟の流のりよそいる筈に申  
 の通りと流見し流りあふさるひてい  
 我々中よそ何程のものといふは

打やあつて流通のあれいとなら  
 背のゆゑにけり二打打破つて流  
 海りあゝふさるひのりよそいす  
 流出のりよそいる流方のりよそい  
 只何れもよそいあゝる流のりよそい  
 るいなる





うまの海にた入り美の橋梓と  
 後山伏と撰つ又と後中をみる  
 法心くあり入 おと 尊く うま  
 くりのつそのふうあてもか  
 強力よりつめと尊く うま 強  
 流るく麻の衣と法と うま の  
判

判 強力よりつめと尊く うま 強  
判 まうけ 後の上よりあ皮く うま 衣付く  
判 あやしの筆と顔とから うま 金か  
判 杖よりつら 判 足つけ うま 強力見  
 日 判 ようくしてあや うま 清む うま 橋を痛  
判 り 判 杖より うま 強小引 うま 引て うま 出

あふふとるそとぬさくはるこは海り入

<sup>山</sup>通りの山伏達の入勢は

<sup>早</sup>

通りの何と山伏は通らると

アムしてあふくは僧達

<sup>二</sup>

の笑よとの通りの是の重初来六

も建走のなるふとるは僧とのるこ

れは山陰乃とけは僧達とくは通

りぬ先勃小通入久 <sup>早</sup> 年法は僧は

勃ふ糸ふとるはては去あう是

の山伏達小通つくとあは <sup>早</sup> 笑よとの

根ま備の <sup>早</sup> ふんは初約うつは

中ふとるあはあふより判友殿の真

秀彌と頼とあひたり人乃継り也  
あひく坊下向の申あはる國  
小敷裏とまじくはやくはやく  
と並道のもくひなるにわたり某の  
よはくともあはるにわたり某の  
人にもあはるにわたり某の  
人にもあはるにわたり某の  
人にもあはるにわたり某の  
人にもあはるにわたり某の

とくもしと珠からんらんかき

中甲このゆニテんことあひかるとは

あつかひしては抽るはけ上り力及ぬ

るるこゝろにれ勤と物くは常六

珠からんしんかきにしてはかきをば後入

トあつかひニテんことあひかるとは勤とりかん

支山仲とらひのうのうのうのう

とけい トまがひふ勤的まのまのま

とあひ トあひとあひのあひのあひ

十二周縁のひとあひてあひ 九ま

まんこのかき トあひ トあひ トあひ

あつかひ トあひ トあひ トあひ

八雲の蓮葉とふまへり出入身よ  
 阿んろこことあいらぬの  
 山峽と愛まて打とめ踏らんや  
 時の思らんらりふいわ指環の  
 直符とあこらんやいらぬよひて  
 額ひらへりいらぬあひらんえん

とまむとくくと押しあへいらぬ  
 勝負のたふさひつらいらぬ  
 ちれ勢をよと信ひらいらぬ  
 とまむのいいまいらぬ  
 進いんいまいらぬ  
 何と勢を信いまいらぬ

がより物を仕儀のわくの社後の中より

往來の仕儀一書をたせし。物を仕儀を付

つ。ものしるに社よきよをたせし。つら

おもんむに大恩を蒙るの秋の月の祿の

ん乃おまふかれ生一去秋のあはれ後

驚くはつらふりあり。安宅中法帝あり

まの清かきよまむ武皇皇帝と名付たり

ふのわいの婦人お打れまらんがやま

河津服小あはく。涙をまつくわく

せんるふびらるるあはく。ほろり

とが程の是る場の結あんのと悲し

後系坊てらん。涙をたせし。安

残のまじはる業のげよひのいかに  
おがころり當り来まての枝も蓮葉の上  
とせん波命おき首教く自と天と  
ひけく積上らり冥の人の約  
怒れどあて通りくるく

九通りへ

友友のは通りの

ま

て

かお昔わすて

とくあの強力のぬそ

たよりのあては

<sup>甲</sup>あゝの強かりちと人おほひるご口者のひ  
 程お細めくひよ <sup>三</sup>何とんらんよ  
 へるごのあへくうぬ信よそひに根根に  
 ぶくひを <sup>甲</sup>判友あふはるご  
 者のひ程お為居のるあてひ <sup>三</sup>屋  
 えんごのあひ判友あふはる強かり

へるごのあひ出の腹きや目まへくらのあひあ  
 へるごのあひ出の腹きや目まへくらのあひあ  
 葉て瑞あふるひと人あもあへへ  
 へるごのあひ出の腹きや目まへくらのあひあ  
 へるごのあひ出の腹きや目まへくらのあひあ  
 へるごのあひ出の腹きや目まへくらのあひあ  
 へるごのあひ出の腹きや目まへくらのあひあ

あひ



一 後ふめどけあふ人さる  
 一 何故おしくは程毎と強  
 一 力おら力とぬさあめれ敵乃  
 一 みる回ハ臆痛乃いりかと十人何山  
 一 伏ハ打力ぬさけしてさめられ  
 一 ち極いり成夫まふ種と恐(入)

一 通り入 三約 老の男といもや後難よ  
 一 程あきつていなるけし本小誓情体と  
 一 いた上ハ極も只今の程りおるんた  
 一 一程あきつていなるけし本小誓情体と

毛書に君乃侍んべしハニ 是れなり  
 今年をより杖也ハニ あつてせむより  
 心ハニ よく清まハニ 杜ハニ 入ハニ 柳ハニ あり  
 今年のつそん更ふハニ 几多ハニ ありあり  
 是れありとハニ 只夫の清ハニ かつはたハニ 雲ハニ

今年も我とあやハニ めハニ 生涯ハニ 追ハニ りハニ あり  
 るハニ あふハニ ごとくハニ のハニ 心ハニ ひハニ ともハニ せんハニ あり  
 てハニ 只ハニ 哉ハニ のハニ 下ハニ 入ハニ へハニ 清ハニ ありハニ あり  
 我と杖ハニ るハニ もハニ 年ハニ をハニ よりハニ 杖ハニ 小ハニ 心ハニ 入ハニ 懐ハニ の  
高 清ハニ 懐ハニ ありハニ ともハニ ありハニ 清ハニ ありハニ ありハニ ありハニ  
 清ハニ 懐ハニ ありハニ ともハニ ありハニ 清ハニ ありハニ ありハニ ありハニ ありハニ  
 清ハニ 懐ハニ ありハニ ともハニ ありハニ 清ハニ ありハニ ありハニ ありハニ ありハニ





一海をぬきや船のうほよやあま

早

ね

しうほよやいぬ唯うらな

早

い根を山伏しらぬをいよと

びりふ面目もくい程ふ追付

つあせうさるてあそ海

ね

てあそ入

まのよつてびりふ面目もくふと

笑もろしき酒のいんばく美ら

三

らんちびのゆきてはめい舞ら

ばよそい愛ももさるしら人の情

の道ふびけてはかきんかき色

ね

色程ふかきんかきんかき











梅 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*

*Ume* 早 *Ume*











おぼろ子守歌んてれたの風世の秋  
 ちとほふらひる月夜がくまもやう  
 ねんころりふの東ふゆんぬれさる  
 もらふらふらふらふらふらふらふら  
 乃のわらわらあり梅の花をいり

えんころりふの東ふゆんぬれさる  
 りやうころりふの東ふゆんぬれさる  
 てんころりふの東ふゆんぬれさる  
 ちとほふらひる月夜がくまもやう  
 ねんころりふの東ふゆんぬれさる  
 もらふらふらふらふらふらふらふら  
 乃のわらわらあり梅の花をいり



百

本

美念はまはてを花は梅梅名はは

十

まはくそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ  
くそまはくそまはくそまはくそ

綿木

美々もまはてを花は梅梅  
かまひちをねん本色は花は  
目ん乃傍よそは戦いもの東園  
まはくそまはくそまはくそまはくそ  
美のまはくそまはくそまはくそ

思ひ乃りしきくはしなむと  
 けくはむくくはむもして  
 夕暮のやまのさる後夜  
 ひとあはる陸奥のさる美山色  
 付乃りよりりく乃り外乃りの細布織  
 どのくは錦木をさる人

陸奥のさる美山色  
 夕暮のやまのさる後夜  
 ひとあはる陸奥のさる美山色  
 付よりりく外の細布織  
 どのくは錦木をさる人



<sup>甲何</sup> 錦木の布を織るに  
 女が持てる布に  
 織るに織る布に  
 又  
 男の持てる布に  
 織るに織る布に  
 又  
 女が持てる布に  
 織るに織る布に  
 又  
 女が持てる布に  
 織るに織る布に  
 又

<sup>乙何</sup> 錦木は織るに  
 織るに織る布に  
 又  
<sup>丙何</sup> 錦木は織るに  
 織るに織る布に  
 又  
<sup>丁何</sup> 錦木は織るに  
 織るに織る布に  
 又  
<sup>戊何</sup> 錦木は織るに  
 織るに織る布に  
 又  
<sup>己何</sup> 錦木は織るに  
 織るに織る布に  
 又

ちかひのあふ縁木細布乃まのい色  
 あくよしなむらびも及せぬよあふ  
 ちかひのあふ縁木細布乃まのい色

ちかひのあふ縁木細布乃まのい色  
 ちかひのあふ縁木細布乃まのい色  
 ちかひのあふ縁木細布乃まのい色

ちかひのあふ縁木細布乃まのい色  
 ちかひのあふ縁木細布乃まのい色  
 ちかひのあふ縁木細布乃まのい色  
 ちかひのあふ縁木細布乃まのい色

こまじいじのわひくたをよみて

眼とむせとせ 女 名ととまて 女 わ

ぬと種と 女 横奇の 上 掃本いそ

あう社朽より風くさふ乃細布

揃わり 女 も 女 と 女 と 女 横 女 細布

ら 女 さらり 女 も 女 ぬ 女 野 女 として 女 あり 女 掃

し 女 の 女 し 女 も 女 ち 女 の 女 とい 女 り 女 りの 女 松

乃 女 の 女 し 女 り 女 も 女 ち 女 の 女 糸 女 色 女 掃

本 女 の 女 ち 女 り 女 よ 女 り 女 も 女 ち 女 ら 女 ん 女 く

早 掃 早 ら 早 ん 早 く 早 細布の滑ぬ掃

背 早 より 早 け 早 の 早 あ 早 り 早 の 早 男 早 女 早 の

中 早 まで 早 ら 早 け 早 の 早 掃 早 本 早 と 早 他 早 り 早 女 早 の 早 ち 早 の 早 掃

よきことなる本ありはるく  
 多しことなるもは本とらふ  
 後よきことなる本とらふ  
 何よきことなる本とらふ  
 二年とらふは本とらふ  
 よきことなる本とらふ

もは二年とらふは本とらふ  
 人よきことなる本とらふ  
 後よきことなる本とらふ  
 多しことなる本とらふ  
 何よきことなる本とらふ  
 二年とらふは本とらふ  
 よきことなる本とらふ





鐘林

はらうヤラもさうさひしきとてく塚乃うら  
おと入よくるま物い塚よ入より  
甲上のほのほのほまよクく下福  
まん物り秋風乃松乃あさよ  
色さうく乙上考ぬゆやあぬらん  
く乙上に清傍一樹一ほるあれ

とくじも他まの塚そとま物よほ  
しるちくるのあれハ社がくや  
おと入るま乃花のまう乙上  
あまよ甲上まよ乙上とれ清法わら  
わらう乙上報乃は吊のわあにせとら  
ゆるるまうりたむ乙上一と二年の

目殺つる。い綿衣乃あひひる法  
 乃ちくろくろ難まうてく安  
 とんいん。今しんくろよ出あ  
 んあこの三年のなむの  
 上上  
 愛あまのうまの川年乃ちん  
 今とゆらぬとあむの

思ひ草乃法よりかこる極乃  
 由かりし教られ出るとんま  
 いあくくあくれ座へぬし  
 刺利色あまのりうく  
 上上  
 高靴のやあまあまあ  
 つとえこつる肉のや焼の

於あつてうある人みうらよき  
 物以て錦木とつきて昔と歌の  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔うつと世人もいひあむ  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る

一 地はあつては梅人社終志

りつてあつては梅人社終志  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る

昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る  
 昔よそあひりきもあや現る

色細布乃らきとゆきこころに

おのころ綿よみたてし

よみしを 母上 田んぼの

あぐひえのきさるゆき

あぐひえのきさるゆき 女 秋乃虫の

あぐひえのきさるゆき 女 秋乃虫の

あぐひえのきさるゆき 女 秋乃虫の

あぐひえのきさるゆき

あぐひえのきさるゆき

あぐひえのきさるゆき

あぐひえのきさるゆき

あぐひえのきさるゆき

あぐひえのきさるゆき

のさかり乃あくるさきくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ  
さくしほりくるあさくしほりくるあ

あつれは今あひくら縁よりにて  
あある一糸あ曲乃くりにさくえん  
こらんえれは女着中よ。様も然り  
ありは川よら橋本とともへあ  
めうらちよ細帯のづゝるとるひの  
者よそくくらぶ色社あふれんて





せの中をうらつる後木 織の細布の  
 ちのりく後木の表越の重の極として  
 ちの乃親もつしやく漢もやあえ  
 光ぬさた社後人ある地があか後木  
 と細布と後をやらせて松尾織くる  
 われ糸の重中の極を後よくる

雲林院

曲出一拍子トル 佐閑 立

第一 桑後さく後毛しびるさ次のく雲れ  
 ち屋一と都人 先は津の國産  
 屋れ里にじん 國中者うてい  
 家いとをながり 法なるし伊  
 勢也流くと手な色い糸はあゝ秋

雲木



少きある其爰と語りては程

よ<sup>廿二</sup>今都に上るもやと存<sup>廿三</sup>

花<sup>廿四</sup>あつたお<sup>廿五</sup>ろくろ<sup>廿六</sup>目<sup>廿七</sup>を<sup>廿八</sup>や<sup>廿九</sup>う<sup>三十</sup>

う<sup>三十一</sup>か<sup>三十二</sup>あ<sup>三十三</sup>る<sup>三十四</sup>鳥<sup>三十五</sup>乃<sup>三十六</sup>ね<sup>三十七</sup>ひ<sup>三十八</sup>く<sup>三十九</sup>物<sup>四十</sup>の<sup>四十一</sup>所<sup>四十二</sup>

ぞ<sup>四十三</sup>く<sup>四十四</sup>海<sup>四十五</sup>く<sup>四十六</sup>色<sup>四十七</sup>も<sup>四十八</sup>なる<sup>四十九</sup>ま<sup>五十</sup>れ<sup>五十一</sup>糸<sup>五十二</sup>乃<sup>五十三</sup>月<sup>五十四</sup>れ

勢<sup>五十五</sup>ふ<sup>五十六</sup>急<sup>五十七</sup>く<sup>五十八</sup>なり<sup>五十九</sup>わ<sup>六十</sup>り<sup>六十一</sup>危<sup>六十二</sup>れ<sup>六十三</sup>ま<sup>六十四</sup>ま<sup>六十五</sup>を<sup>六十六</sup>

ま<sup>六十七</sup>を<sup>六十八</sup>初<sup>六十九</sup>く<sup>七十</sup>我<sup>七十一</sup>の<sup>七十二</sup>糸<sup>七十三</sup>を<sup>七十四</sup>ば<sup>七十五</sup>録

の<sup>七十六</sup>月<sup>七十七</sup>の<sup>七十八</sup>あ<sup>七十九</sup>乃<sup>八十</sup>海<sup>八十一</sup>塩<sup>八十二</sup>の<sup>八十三</sup>ひ<sup>八十四</sup>の<sup>八十五</sup>ま<sup>八十六</sup>づ<sup>八十七</sup>

ま<sup>八十八</sup>く<sup>八十九</sup>く<sup>九十</sup>な<sup>九十一</sup>れ<sup>九十二</sup>う<sup>九十三</sup>け<sup>九十四</sup>ふ<sup>九十五</sup>さ<sup>九十六</sup>り<sup>九十七</sup>と<sup>九十八</sup>か<sup>九十九</sup>

ゆ<sup>一百</sup>く<sup>一百一</sup>わ<sup>一百二</sup>ま<sup>一百三</sup>が<sup>一百四</sup>海<sup>一百五</sup>く<sup>一百六</sup>書<sup>一百七</sup>く<sup>一百八</sup>身<sup>一百九</sup>念<sup>一百十</sup>方<sup>一百十一</sup>

い<sup>一百十二</sup>さ<sup>一百十三</sup>り<sup>一百十四</sup>火<sup>一百十五</sup>乃<sup>一百十六</sup>あ<sup>一百十七</sup>ら<sup>一百十八</sup>り<sup>一百十九</sup>と<sup>一百二十</sup>と<sup>一百二十一</sup>人<sup>一百二十二</sup>は<sup>一百二十三</sup>難<sup>一百二十四</sup>波

は<sup>一百二十五</sup>な<sup>一百二十六</sup>や<sup>一百二十七</sup>こ<sup>一百二十八</sup>の<sup>一百二十九</sup>花<sup>一百三十</sup>を<sup>一百三十一</sup>こ<sup>一百三十二</sup>も<sup>一百三十三</sup>り<sup>一百三十四</sup>今<sup>一百三十五</sup>の

二十 霖 二十  
三十一 二十 下 一 个、二九  
三十二 二十 下 二 个、二九  
三十三 二十 下 三 个、二九  
三十四 二十 下 四 个、二九  
三十五 二十 下 五 个、二九  
三十六 二十 下 六 个、二九  
三十七 二十 下 七 个、二九  
三十八 二十 下 八 个、二九  
三十九 二十 下 九 个、二九  
四十 二十 下 十 个、二九

よむれ空ハ暮れ暮るごとく

下 三 三 三 三 三 三 三 三 三 三  
に 緑 屋 名 楓 の 山 の 名 山 寺 名 寺  
剛 珠 の 風 吹 ぬ ぬ 花 ぞ ち ゝ ち ゝ ち ゝ

雲が羽風よおのり松乃ひん

三 三 三 三 三 三 三 三 三 三  
人 ぞ ち ゝ ち ゝ ち ゝ ち ゝ ち ゝ ち ゝ ち ゝ ち ゝ ち ゝ  
三 三 三 三 三 三 三 三 三 三  
ふりこみとちりしつる花やを

心せし人つひらの河をらるる世の  
 人そこれを落人甲し花のこそ  
 ぬまじしを公ありさくもらるる  
 さい花のおひさあひそニテさへ  
 ちるさ花かなもた花ぶうた  
 わらたさしむつらりさしを教

ねよ八枝をうらうら風よ  
 アもれうまよ甲何さ  
 は時金それや人海人橋を  
 ちよおわく家つきたん  
 よまきうらニテた信よ  
 又首舟下の風花のわらり

ふくみくもあけらばはるもあはれ

かきかきんかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

かきかきかきかきかきかきかき

色情ありよふ川づ色のわらそひ

柳橋よとこまきせて教でまゐり

とみらうくいん梅人ばあひ

何とこり本わあそぞ 早菊 是ら

津の四芦屋の里にとまん草

者 いづか 家つとまかなうり

しらも伊勢物語と手あまの雲

よのち朝れまにどあつた陰あり

色紅れくゆあさんれつる女性ぞく

あつたあまのいづかこのがられ

あつたあまのいづかこのがられ

あつたあまのいづかこのがられ

伊勢物語乃根なるの沖の舟を

ひびく女性ハ二条女をいふと云ふ初め

陰びくさくさの雲林と云ふと云ふ

さあめゆりあはたあつらひく作

経はあまのまことありての ニテ 根は

は身れんといふらんよつての ニテ のが

まよひの事んとかかりて今宵の夢に

あまのひかり多くと云ふ 早草 くれ

しるしを来れりし袖と云ふ 早草

まよひの事ん ニテ 根はあまの

まよひの事ん 早草 くれ

しるしを来れりし袖と云ふ 早草

く教みふは身はいつたう人屋ん

三子句

海はゆのれあらび登るびり男

やみさるぬ 甲斐 相はたらしひり

とくまー海さう 甲斐 我名と

何とぞののたけし思ふは

未だは月よあはれぬ 甲斐 波よじ

うと悲教一えり花乃陰山糸

く教者指とんあくも時あんと

もくさんとがれ空のひと 甲斐 かく

りぬ 甲斐 とも 甲斐 せ 甲斐 かり 甲斐 不 甲斐 建 甲斐 け 甲斐 しく

い 甲斐 づ 甲斐 け 甲斐 り 甲斐 本 甲斐 陰 甲斐 月 甲斐 よ 甲斐 け 甲斐 せん 甲斐 次

書 甲斐 ぶ 甲斐 ば 甲斐 な 甲斐 め 甲斐 れ 甲斐 も 甲斐 夜 甲斐 神 甲斐 と 甲斐 う 甲斐 ま 甲斐 ぎ

雲林

二二二

二二二

二二二

二二二

少二二二

月二二二

や二二二

家二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

の二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

今二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二

二二二









